

プロローグ

長い夢を見ていた。夢の中で彼は褐色の軍服を着けた若者だった。なのに軍服の胸は、主席から賜わった勲章で埋まっている。

彼は自らに与えられた“王国”に立っていた。冷えびえとした岩肌が顔をのぞかせる痩せた大地。

しかしその大地は豊穡な実りをもたらした。季節になれば一面を薄桃色の花が埋めつくす。実りはその花の果実から得られた。

主席の命のもと、国家事業としておこされた巨大な農園と、それを護る兵員の管理が彼の任務だった。

それは夢ではなく、確かに存在した。

彼は兵舎の最上階に位置する執務室の窓から、広大な畑を見おろした。農園の実りは、鉄道で北に運ばれ、ロシア人の手で換金された。憎むべきアメリカ人どもの金、USDドル。そのドルが国家を救う。飢えた主席の民に食物を届けるのだという。

しかし彼はそれを信じてはいなかった。首都では、毎夜のように主席とそのとり巻きたちに よるパーティが開かれていることを彼は知っていた。もちろん飢えた主席の民らはそれを知らない。

このあたりでも凶作はひどく、以前は見ることの多かった野良犬の姿もめっきり減っている。彼の兵士たちはさすがに食糧の優先配給を受けているので、飢える者はないが、多くの地元民は法を犯し、ロシア側へ越境して食糧を調達している。

そこに国境があるうと、このあたりは古くから民族の居住地だったのだ。遠く祖先のつながったロシア人は、物乞いに見まちがうほどに貧しい同胞に、物々交換で食物を譲っている。

この国はもうそれほど長くはない。いかにすぐれた主席であろうと、三年つづきの大凶作と頑なな鎖国政策の失敗をとり返すことはできないだろう。

少なくとも三年前なら南進する手もあった。兵員に士気は残っていたし、兵糧に備蓄もあった。

先代の主席の名を冠した大学で戦争史を学んだ彼は、戦争とは常に豊作の翌年に起こすべきものであると知っていた。充分な兵糧を確保した後、侵略戦争は開始される。いかに士気を煽ろうと、飢えに苦しんでいては戦闘に勝利はない。

機を逸したのだ。

きのうの出荷に、彼は副官の大尉を同行させた。大尉は取引相手のロシア人と今後を協議することになっている。

八年間、彼はこの地を支配してきた。その間に、秘かに貯えた作物がトンはある。その一

トンの作物には、同じ重さの黄金に匹敵する価値がある。

いよいよこの国が減びるとき、自分は首都に呼び戻されるだろう。そしてかつてはあれほど欲しかった將軍の称号とひきかえに、主席に命をささげることが求められるにちがいない。

だが彼にそのつもりはない。北へ向かう列車に乗り、国外へ脱出する。一トンの作物とひきかえに、ロシア人たちがその手配をしてくれる筈だ。

そのあとの行き先は、彼にもわからない。

中国か、ロシアか。それとも――。

「――將軍」

囁き声に、彼は目を開いた。下半身が重い。ほとんど感覚を失いつつある下半身は、病が脊椎に及ぶ恐怖を予感させる。

いや、ちがう。これは病のせいではなく、あの苦痛を押し止めるための薬の副作用なのだ。その薬が、かつて自分が祖国から持ちだした作物から作られていることを彼は知っていた。

一トンの阿片あへんから精製されるモルヒネはいったいどれほどの量になるのだろうか。そしてそのモルヒネからさらに作りだされるヘロインは。

それが彼の今の「王国」を作りだした。祖国にいたときとは比べものにならないほど清潔で、管理のいき届いた「王国」。ちっぽけだが、しかし途方もなく金のかかった屋敷。

「食事のお時間です」

眠りから呼び戻した看護婦がいつて、リモートコントローラーで彼のベッドを起こした。食など、ない。もう一度夢の世界に戻って、かつての「王国」に帰りたかった。

だがそれはかなわない。食事のあと、彼のもとを部下たちが訪ねてくることになっている。彼を崇拜する少佐、大尉、ロシア人と中国人。少佐と大尉は、今では大佐と少佐に昇官した。自分の任命だ。

月に一度の会議がじきに始まるうとしている。ベッドに横たわったまま、將軍として、部下たちに命令を彼は下す。

だがそれも、もう長くはない。彼自身の「王国」も滅びるときが近づいている。

そのときは祖国の土に還れるのだろうか。

それが今、一番の気がかりだった。

矛盾こそが犯罪の世界だ。かつて、科学は戦争によって発達する、といわれた。そしてその発達した科学をいち早く金儲け^{かねもち}に利用するのが犯罪者だ。

犯罪とは、法を犯すこと。しかし最先端の科学技術の利用に対し、法は常に遅れをとる。たとえばハッキング、たとえば新種のドラッグ。

法に規定され禁じられていない行為は、犯罪とはいえない。どれほど中毒性が高く、常習者を夢中にさせる薬だろうと、「麻薬」「向精神薬」の指定がなければ、売りまくったところで罪に問われる心配はない。

いつだって法はあとからやってくる。頭のいい連中は、法の枷^{かせ}がかかる前にさっさと金を稼いでいる。

なのにこいつらの世界には矛盾がある。ハイテクをまっ先に金にかえる頭脳をもちながら、コンピュータ画面の数字を信じない。電子マネーによる代金決済を決して取引にもちこもうとしない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。